

中級後期文法クラスにおける学習者の 対人関係に関する意識とその変化について —スピーチスタイルの意識化を中心に—

小川 恭平

【要旨】 本稿は、筆者が日本語教育実践研究 1 において、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)の中級後期文法クラス「J710-1A」で行った、学習者に対人関係を意識させるための試みについて報告するものである。授業中の説明や小テストの解説に加え、予備課題や対人関係に関するアンケートを実施することで、文法クラスであっても学習者の気づきを促すことができる可能性が示唆された。実際に授業後の記述アンケートからは、一部の学習者の対人関係の意識に関する変化が見られた。さらに、そうした試みが学習者のニーズにも合致し、受け入れられるものであることも分かった。しかし、中級レベルの学習者の問題や文法クラスで実践することの限界も見え、他のクラスとの連携を図りながら学習者の意識を継続させていく必要があることが分かった。

【キーワード】 対人関係 スピーチスタイル 中級日本語学習者 文法クラス 気づき

1. はじめに

筆者は 2015 年度春学期から、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)の中級後期文法クラス「J710-1A」に入り、授業見学や小テストの採点案作成などを行った。その中で、中級後期レベルの学習者であっても、文脈を理解し、対人関係を意識することが難しいようであることがうかがえた。例えば文完成問題では、次のような解答例が多く見られた。

先週は東京に行くつもりでしたが、忙しくて行けなかった。

(『中上級 実用日本語文法』第 12 課)

この問題は下線部の空欄を学習者が埋めて文を完成させる問題である。「つもりでしたが」という丁寧体が提示されているにも関わらず、2 つ目の空欄は「行けなかった」と普通体の表現になっている。この場合、問題文に明記はされていないものの、文脈としては丁寧体で話すべき相手に事情を語っているもので、最後だけが普通体になるのは不自然である。このようなスピーチスタイルの問題は、相手との関係に合ったものを選択していくことが必要となるため、コミュニケーションに直結するものであり、実際のコミュニケーションを主眼に置いた文法クラスでは重要であると考ええる。

上記のような問題点を踏まえ、筆者は中級後期レベルの学習者であっても、スピーチス

タイトルや対人関係に意識を向けさせることが必要であると考えた。そこで本稿では、筆者が 2015 年度秋学期に、筑波大学 CEGLOC の中級後期文法クラス「J710-1B」で行った教育実習（日本語教育実践研究 1）について報告し、文法クラスを通じて中上級学習者にスピーチスタイルを意識させる試みについて考察していく。

2. 先行研究

2. 1 スピーチスタイルの指導について

三牧（2007）は、学習者の抱える文体の問題について、次のように述べている。

例えば、親しくなっても丁寧体を使い続けることによっていつまでもよそよそしいという印象を与えることがある。あるいは、逆に、フォーマルな場面でくだけすぎ文体や語を使ったり、あるいは目上の相手との会話中に頻繁に普通体にシフトしたりして、結果として悪印象を与えてしまうという場合である。このような問題は、良好な人間関係構築の阻害要因となりかねない。

（三牧 2007：59）

こうした前提に基づいて、三牧（2007）は会話データから日本語母語話者と学習者の使用実態を論じ、会話教育への提言を行っている。その中で、初級・中級学習者はスピーチレベルに関する認識が薄いことを指摘している。指導としては、まず日本語の文体の運用に関する全体像を講義し、初級段階から文体を意識させ、中級では文体意識をある程度持続しながら会話をするを課題に置いて会話練習をさせ、上級以降ではスピーチレベル管理がスムーズにできることを課題にするといったように、段階的な指導が必要であると述べている。本稿は文法クラスでの実践例であるため、三牧（2007）とまったく同様の指導はできないが、中級レベルの学習者に対して、スピーチスタイルに意識を向けさせる試みが重要であることはここからもうかがえる。

2. 2 意識化について

ウォーカー（2008a）は、待遇コミュニケーション教育／学習において、「意識」の捉え方・生かし方について論じている。先行研究から、「待遇コミュニケーション能力」には「意図」「気づき」「認識」「運用」の 4 つの概念に関わる「意識」が重要であると述べ、これらを柱に「待遇コミュニケーション能力習得のプロセス」という仮説を立てている（図 1）。その上で、初級学習者にスピーチスタイルを指導する場合を例として挙げ、4 つの概念を以下の表 1 のように位置づけている。



図 1 待遇コミュニケーション能力習得のプロセス（ウォーカー2008a：13）

表 1 スピーチスタイル指導の場合の 4 つの概念

意図	なぜスピーチスタイルを学習する必要があるのか、それを学習すると何ができるようになるのかなど、学習の「意図」（目的）を自覚して授業に参加する。
気づき	ロールプレイや映像素材などを通し、あるスピーチスタイルが使われているのは、話し手が「人間関係」と「場」をどのように捉え、どのように伝えようとした「意図」の表れであるかということなどに気づく。
認識	自らの「気づき」を振り返り、そこからどのような一般性を導くことができるかについて判断を試みる。教師や他の学習者とのディスカッションを通じて理解を深め、教室内外でスピーチスタイルに意識を向けるようになる。
運用	「意図」→「気づき」→「認識」のプロセスの各段階で行う、スピーチスタイルの言語形式の練習、ロールプレイ、映像素材を用いた聞き取りタスクなど。

（ウォーカー2008a をもとに筆者作成）

このような「意識」のプロセスを提示した上で、ウォーカーはそれを学びに生かす方法として、「コミュニケーション主体」としてのやりとりのみならず、「コミュニケーション観察者」という立場からの活動を提案している。

これらの指摘を踏まえ、ウォーカー（2008b）は、シンガポールの大学における初級日本語学習者を対象として、コミュニケーションの参加者・観察者としての観察タスクを行っている。学習者が日本人小学校の児童と行った 2 時間の交流課題の中でスピーチスタイルについて観察するよう指示を与え、スピーチスタイルに関して気づいたことについて自由記述式のレポートを課し、そこから学習者の「気づき」について調査した。その結果、「コミュニケーション観察者」としての「気づき」に関する記述量が、「コミュニケーション参加者」としての記述量を大幅に上回っており、初級段階においてもスピーチスタイルの教育は可能であると述べている。ただし、「コミュニケーション観察者」という立場を重視し、「理解」を中心とした教育を進めることが有効であると指摘している。本実践のような文法クラスにおいては観察タスク等の実施は困難であるが、学習者の意識をスピーチスタイルに向ける工夫として、「気づき」について自由記述式で書かせるタスクなどは可能であると思われる。次章では、教育実習（日本語教育実践研究 1）で実際に行った内容について報告する。

3. 実践報告

3. 1 実習の概要

筆者が実習を行ったクラスの概要を以下の表 2 に示す。

表 2 実習クラスの概要

担当クラス	中級後期日本語文法 J710-1B
実施期間	2015 年度秋学期 ABC モジュール（2015 年 10 月 6 日～2 月 9 日）
学習者数	22 名（期末試験を受けた人数）
使用教材	『中上級 実用日本語文法』（CEGLOC 教材）
担当教員	許明子先生

クラスでの具体的な実習内容は以下の通りである。

- ・毎回の授業観察
- ・毎回の小テストの採点案の作成および、誤用に関するコメントの記入
- ・授業初めに行う、小テストの返却とフィードバック（全体的な傾向に関するコメント）
- ・web 上の教育支援システム manaba での予備課題出題、添削
- ・対人関係・スピーチスタイルに関するアンケートの実施（毎回の授業後）
- ・2 回の教壇実習（内容を以下の表 3 に示す）

表 3 教壇実習の内容

	1 回目	2 回目
実施日	2015 年 12 月 8 日	2016 年 1 月 26 日
担当内容	『中上級 実用日本語文法』 第 7 課 終助詞	『中上級 実用日本語文法』 第 11 課 予想外
使用教材	『中上級 実用日本語文法』、自作の文法説明スライド	
授業の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・終助詞の意味を理解する ・終助詞を使う相手との関係を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・文脈を読む ・話し手の気持ちを考える
授業の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の小テストへのフィードバック ・スライドで文法事項の確認 ・練習問題の答え合わせ、解説 ・小テスト実施、対人関係・スピーチスタイルに関するアンケート 	

3. 2 スピーチスタイルの意識化のための試み

本節では学習者にスピーチスタイルを意識化させるために行った活動について報告する。

(1) 小テストの採点案作成および解説

小テストは各課の終了後に実施される 10 問程度のものであり、基本的には選択問題の part1 と、文完成問題の part2 からなる。part2 の問題は会話形式のものやモノログの問題があり、スピーチスタイルの誤りは減点し、コメントを書いて返却するようにした。また、返却後の解説では、間違いが多かった問題の他に、スピーチスタイルの誤りについて必ず触れるようにした。

（2）対人関係・スピーチスタイルに関するアンケート（資料 1）

初回の授業で学習者に許可を得て、毎回の授業実施後にアンケートを実施した。「今日の授業で、対人関係やスピーチスタイルについて気づいたこと、わかったことを書いてください」という設問で、自由記述式であり、特に字数などの指定はしなかった。また初回は文法クラスについてのイメージを問う設問と、クラスで学びたいことを問う設問を、最終回は同様に文法クラスのイメージとクラスで学べたことを問う設問を加え、学習者の意識の変化を見ようとした。

（3）manaba の予備課題

web 上の教育支援システムである manaba を利用し、毎回学習文型を使った作文問題を出題した。希望する学習者はこれに解答し、解答があった学習者には添削・コメントを返した。以下の図 2 のように、各課につき問題数は 3 問とし、スピーチスタイルについて意識させるため、問題はすべて会話形式とした。その際、必ず会話の相手や場面が分かるように説明を加え、スピーチスタイルの誤りについては減点し、解説コメントをつけた。

1. <教室で>
 学生:来週からの授業はどの教室でやるんですか。
 先生:A教室でやります。今日休んだ人にも来週までに連絡(れんらく)。
 1.1 。
 学生:わかりました。

2. <サークルの先輩と後輩の会話>
 先輩:明日の試合、たいじょうぶそう?
 後輩:できることは全部1.2 。あとは明日、がんばるだけです。

3. <教室で友だちと>
 A:田中先生って独身(どくしん)なのかな?
 B:いや、1.3 よ。お子さんも2人いるし。

前へ 次へ
 閉じる

図 2 manaba の予備課題の問題例

この他に、担当教員からも授業中に対人関係やスピーチスタイルに関する説明・コメントが学習者に対してなされ、常に文法項目の学習のみにとどまらず、実際の使用を意識したクラス運営がなされていた。

3. 3 学習者の意識

本節では 3.2 で実施した内容をもとに、学習者の対人関係やスピーチスタイルに関する意識について考察する。まず、実習の経過を以下の表 3 に示す。

表 3 実習の経過

回数	内容	学習文型例	備考
1	オリエンテーション 第 1 課（進行と完了）	ている形、る形	スピーチスタイル について説明
2	第 1 課 小テスト（第 1 課）	ている形、る形	スピーチスタイル について再び説明
3	第 2 課（アスペクトの形式） 小テスト（第 2 課）	ている、である、 ておく、てしまう、複合動詞	小テストの解説で 初めてスピーチ スタイルに触れる
4	第 2 課復習 第 3 課 （「わけ」を使った表現）	わけだ、わけではない、 わけがない、 わけにはいかない	
5	第 3 課、小テスト（第 3 課） 第 4 課（「もの」「こと」を 使った表現）	ものだ、ことだ、 X ものの Y、X ことに Y	
6	第 4 課、小テスト（第 4 課） 第 5 課（比例）	X ば X ほど、にともなって、に つれて、にしたがって	
7	第 5 課、小テスト（第 5 課） 第 6 課（関連を表す表現）	に関わる、をめぐって、 に応じて、次第で	
8	第 6 課、小テスト（第 6 課） 中間テスト	に関わる、をめぐって、 に応じて、次第で	
9	中間テスト解説 第 7 課（終助詞）	ね、よ、よね、わ、かな	教壇実習
10	小テスト（第 7 課） 第 8 課（気持ちを表す表現）	てならない、～てたまらない、 ～てしかたがない、を禁じえない	
11	第 8 課、小テスト（第 8 課） 第 9 課（前置き）	言うまでもない、せっかく、～ たら	
12	第 9 課、小テスト（第 9 課） 第 10 課（話題転換）	さて、ところで、そういえば、 それはそうと	
13	小テスト（第 10 課） 第 11 課（予想外）	とんだ、とんでもない、 まさか、と思いきや	教壇実習
14	小テスト（第 11 課） 第 12 課（意志を表す表現）	よう形、つもり、～まい	
15	第 12 課、小テスト（第 12 課）、 期末テスト		

3. 3. 1 アンケート

22名の学習者のアンケートの回答のうち、対人関係やスピーチスタイルに関する記述を資料2に示す¹。全体的な傾向として、対人関係やスピーチスタイルによく気づく学習者と、最後まで設問の趣旨を理解していない学習者や、文法項目について記述している学習者とに分かれた。しかしながらどの学習者も授業終了後には教科書やノートを見返して授業の内容を振り返りながら回答しており、対人関係のみならず文法学習についても学習者の意識化を促すための活動としては効果的であったと思われる。

初回の授業では、アンケートの許可を得るため、アンケートについて説明した。その中で、スピーチスタイルとは、「です・ます体」（丁寧体）と「だ・である体」（普通体）のことであるということ、その違いが実際のコミュニケーションを行う上で重要であること、上級へのステップとして理解すべき点であることを学習者に告げた²。その結果、アンケートの回答には「先生と先輩に「です・ます」を使って、友達に「だ体」でもいい。（NNS5）」など、スピーチスタイルに関する記述が3例見られた。その他の回答として、第1課の内容であるアспектに関するものや、教師の説明が分かりやすいといったような授業の感想などが見られた。

2回目の授業では、1回目のアンケート結果から学習者に設問の趣旨が伝わらなかったと判断し、改めてスピーチスタイルや対人関係についての気づきを書くように説明をした。その際、学習者が中級後半のレベルであり、日本で生活していることもあって、なぜこのような観点が必要であるかを強調した。それにも関わらず、初回のアンケートと同様、文法項目に関する回答や、授業の感想などが多かった。中には「申し訳ありませんが、今日の授業で、対人関係についての内容はありましたかな（NNS3）」という回答も見られた。しかし実際には教師が会話形式の問題で「誰と誰が話しているか」「2人はどんな関係か」を考える必要があることを強調しており、それをスピーチスタイルの問題と絡めて説明していた。そのため、回答の中には「ます→上司や先輩などに使います る→親の人に使います（NNS10）」や「自分より年が多い人でも、内の人にはです・ます形ではなくため口を使うこと。（NNS16）」などの回答があった。このように初回および2回目の授業ではウォーカー（2008a）の指摘する「意図」を強調することで、一部の学習者の「気づき」を促すことができたと思われる。

3回目の授業では、第1課の小テストを返却し、初めて小テストの結果を見ながらスピーチスタイルについて説明した回であった。学習者のアンケートへの回答を見ると、「先輩が普通体の「だ」を使っても、後輩は丁寧体の「です」を使う時も多いということが分かりました。（NNS3）」「小テストの結果返却を見たら、うっかりすることが多かったですね。スピーチ・スタイルにもっと注意しなければなりませんね。（NNS7）」「練習のときでも、

¹ 以下、学習者を「NNS」とし、22名の学習者をそれぞれ「NNS1～NNS22」と表記する。

² 厳密にはより詳細な説明を行うべきであろうが、ここではまず「丁寧体」と「普通体」との存在を確認し、それらを意識させるための説明にとどめた。

上下関係を考えるべきだとわかりました。(NNS15)」など、多くの記述が見られた。実際に返却された自分の答案とその点数や赤字のコメントを見て、スピーチスタイルが理解できていなかったことについて実感を得たのだと思われる。

しかし4回目のアンケートは、「アспектやはり難しい。授業の内容を分かっても、違った時があります。(NNS4)」「今回の授業の内容が難しかったと思います。理解するために、よく時間や練習は必要があると思います。(NNS17)」など、すべてが文法項目に関する回答となっていた。4回目の授業は第1課、第2課のアспектで学習者が混乱したため、復習を行ってから第3課へと進んだという事情があった。これに関しては、「言語学習の初期段階では、学習者は語彙や文型などに相当の「意識」を払わなければならない、その処理には時間もかかり、できることも制限されてしまう（ウォーカー2008a：11）」という指摘もあることから、学習者にとって文法項目が難しく、対人関係やスピーチスタイルにまで意識が回らなかったのではないかと思われる。ただし文法のクラスとしては、学習者が文法項目のうち難しい点やできなかった点を自覚することも必要であると考え、文法項目以外の回答を強要するようなことはしなかった。

5回目のアンケートでは、教師と学生との会話を完成させる小テストの問題でスピーチスタイルに触れたことにより「先生はときどき普通体も、丁寧語も使います。(NNS9)」という回答が見られた。また、教科書の問題を解いていく中で「言葉を使う相手との関係を考える」ことを教師が説明したため「目上の人には「ペラペラ」というような言葉が使えません。(NNS3)」「第3課 まずはやってみようの4番 A・Bは恋人同士かもしれないので、親しい言い方、たとえば「ひどい！」などを使っているわけだ(NNS12)」などのように、授業内で説明されたことに意識を向けている学習者も見られた。しかし依然として文法項目に関する回答が多数を占めた。

6回目のアンケートでは、対人関係に関する気づきの記述が多く見られた。「「ものだ／ものではない」は助言する表現ですので、上の人には使わないほうがいいです。(NNS3)」「自然な日本語を使いたいなら、文法だけではなく、話す相手との関係を考えなければなりません。(NNS4)」など、第4課の文法項目を教師が運用の際に考えるべき対人関係と結び付けて説明しており、学習者もそれをよく理解していたようであった。また、ほぼ毎回の授業で教師が強調していた「話す相手との関係を考える」という説明から、「「って」は話しことばだから、その彼には固い表現ではなく、話しことばを使うこと。(NNS16)」という回答も見られた。その課で学習する文法項目の他に、教科書の問題の中で対人関係やスピーチスタイルを意識することができるようになってきている学習者もいるようであった。さらに、小テストの解説で、「もらうわけにはいきません」という回答を、贈答の際に貰い手が一度断って丁寧さを表すことがあるという情報と併せて説明したところ、「「もらうわけにはいかない＝もらう」という所は面白かった。(NNS15)」といった回答も見られた。一部の学習者ではあるが、対人関係についてより幅広い視点から考え、気づきを得ることができるようになってきていると思われる。

7回目のアンケートでは、「する」表現と「なる」表現に関する記述が見られた。4課で扱った「こと」から「ことにする」「ことになる」について教師が触れ、自分で決定したことであっても「ことにする」ではなく「ことになる」を使った方が丁寧になる場合があることを説明した。その結果「目上の人には「する」表現より「なる」表現を使った方がいい。(NNS3)」「なる」を使う表現は礼儀のある表現として思われる。(NNS16)」などの回答があった。また、スピーチスタイルについては、小テストの解説で同僚同士のコミュニケーションについて触れ、「スピーチ・スタイルのことについて、だいぶ慣れました。(NNS7)」
「小テスト 会社でも、いろいろなスピーチスタイルがあるから、これからも注意します。(NNS12)」などの回答が見られた。会社では必ず丁寧体でコミュニケーションを行うと考えていた学習者が、同僚同士の比較のカジュアルな場面でのやり取りでは普通体も使えることに気づいたようである。

8回目のアンケートでは、「試験のために、スピーチ・スタイルを気づきました。(NNS7)」の一例のみがスピーチスタイルに関する回答であった。第5課の比例、第6課の関連を表す表現では類似する表現の使い分けに苦戦する学習者が多く、それに関する回答が多数見られた。また、文法項目の性質上、書き言葉での使用が多く、問題の形式も書き言葉やモノログが大半だったこともあり、対人関係についての気づきが得られにくかったのだと考えられる。さらに NNS7 の回答にもあるように、当日は中間テストがあったため、学習者には対人関係に関して気づきを得るための心理的な余裕がなかったことも要因の一つとして考えられる。

9回目のアンケートでは、筆者が第7課「終助詞」の教壇実習を行い、終助詞の用法を対人関係の観点と併せて導入したため、それについて多くの気づきが得られたようであった。「対人関係について、「ね」と「よ」のちがいがあります。(NNS2)」「目上の人に何かを頼むときは「ね」を使いません。(NNS9)」「目上の人に、初対面の人に「ね」は使えないことは知らなかったです。人と関係を縮めたいけど、いきなりそういう言い方できませんですね。これから気をつけます。(NNS19)」などがそれである。一方で「この課の内容を勉強したら、以前はよく「ね」と「よね」を使い違ったことが分かりました。やっぱり、終助詞を使って、会話が自然になる。そして、自分の気持ちもちゃんと伝えられます。(NNS4)」や「終助詞の使い方を勉強しました。簡単だと思ったけど、意外と複雑です。(NNS20)」などの回答も見られた。対人関係に関する具体的な気づきの内容は書かれていないものの、以前は無意識に使用していた終助詞が、運用の際に注意すべき対人関係の観点を導入して説明されることで、注意が必要である文法項目だということに気づいたのだと思われる。

10回目のアンケートでは、授業で教師が第7課「終助詞」の補足説明として、断る際に「そんな急に言われても、すぐにはできないかな...。」のように終助詞「かな」を使う例を紹介した。そのため「日本人は直接に断る表現を使わなく、やわらかく表現を使う。今後気をつけます。(NNS4)」「目上の人にことわりたい場合は「かな」を使う (NNS6)」「日本

人の「No はいわない」を勉強しました（NNS14）」などの回答が見られた。円滑なコミュニケーションを行うための終助詞の使用が学習者に伝わり、気づきに繋がったようであった。

11 回目のアンケートでは、第 9 課「前置き」について扱った回ということもあり、教師が「なぜ前置きを使うのか」について対人関係の観点から説明したことで、多くの気づきが得られたようである。「もし差し支えなかったら」はしらない人と目上の人に使う表現だと知りました。（NNS2）」「前置きを使わないと他人をビックリするかも。（NNS10）」などがそれである。また、教師が授業の中で日・韓・中の前置き表現の違いについて説明したことから、「日本や中国の友達でも「ちょっと…」を使いますが韓国の人は使いません。

（NNS6）」「国によって、対人関係は違うことが分かりました。（NNS7）」などの回答も見られた。さらに、「あのね」というような言葉は目上の人に使わないほうがいい。（NNS3）」という回答も見られた。これはこの回に教師とある学習者とのやり取りで、学習者が教師に当てられて答える際に「あのね」と言ったことを注意されたのを聞いて、別の学習者が回答したものである。対人関係について、教科書の問題から離れ、「コミュニケーション観察者」として実際のやり取りから気づきを得た例であり、広く対人関係について意識を向けることができるようになった学習者もいたことがうかがえる。

12 回目の授業では、教師が「文脈を読むこと」の重要性について説明し、それを授業の目標として学習者に提示した。ここで言う「文脈」とは「誰が誰に」「どのような意図で」「どのような場面で」言葉を使っているかということであり、それを考えることによって、学習者の作る文がより自然になるということが強調された。その結果、アンケートでは「文脈を読む事。（NNS10）」「文脈を読むことが大切であることがわかりました。（NNS18）」という回答が見られた。

13 回目の授業は筆者が第 11 課「予想外」について教壇実習を行った。12 回目の授業で強調された「文脈を読むこと」の大切さを引き継ぎ、「文脈を読むこと」「話し手の気持ちを考えること」の 2 つを授業の目標として明示的に学習者に提示した。「誰にとってどのようなことが予想外であるのか」「予想外のうち、驚き、怒り、呆れ、褒めなど、話し手のどのような感情であるのか」を理解することが自然な文を産出するために必要であり、また相手の気持ちを理解することが円滑なコミュニケーションを行うことに繋がると説明した。その結果、「文脈や話し手の気持ちの重要性を理解しました。（NNS6）」「話し手の気持ちを考えて、理解できます。（NNS8）」などの記述が見られ、運用に向けて学習者が文脈や話者の気持ちを意識して授業に取り組んでいた様子がうかがえた。

14 回目の授業では、第 12 課の文法項目のうち「つもり」の使い方として、教師が学習者によくある「明日は東京に行くつもりですから、授業を休みます」のような表現を取り上げた。許可求めに際して自分の意志を表現することがミスコミュニケーションに繋がることを指摘したことで、アンケートでは「つमりの使い方がいろいろだが、例えば先生にメールで「東京に行くつもりなので、授業に行けなくなりました」という内容をよく書く

ので、「東京に行こうと思うので、休ませていただけないでしょうか」を書いた方が良い。

（NNS13）」「お願いをするとき、自分の意志を言うのを避けた方がいいことを勉強になりました。（NNS19）」などの回答が見られた。学習者にとって身近な具体例を示しながら説明を加えたことで印象に残り、運用面で重要な点であると認識できたようである。

15 回目は授業の最終回であり、期末テストが行われた。アンケートも最終回向けのものであるため設問は 14 回目と異なるが、自由記述で感想を書く欄には「スピーチスタイルや丁寧語は日常生活に注意すべきものです。日本人と話すとき、自分が話したい言葉を正確的に伝えることは難しいが、ちゃんとできるようになりたい。（NNS6）」「いろいろ勉強になりました。文法そのもの、対人関係、スピーチスタイルなどの各角度から、文法というものを再認識しました。今後の日常生活にも勉強にもとても助かります。ありがとうございました！（NNS12）」「スピーチスタイルについてこのクラスで勉強できて、いいと思います。自分の日本語のためにやくにたちました。（NNS15）」など、対人関係やスピーチスタイルに関する記述があり、一部の学習者には意識化ができ、それが学習に役に立ち、今後とも意識を持って学習に取り組もうとする姿勢がうかがえた。

3. 3. 2 manaba の予備課題

3.2 で挙げた manaba を用いた予備の文完成課題について触れる。各課の項目に対して 3 問ずつ問題を出し、回答があった学習者には添削をし、コメントをつけた（図 3）。以下の表 4 は、第 1 課から第 12 課まで、学習者のスピーチスタイルについての誤用数を示したものである。なお、予備課題であり全員が回答したわけではないため、表 4 には回答のあった学習者のみを示した。

3. <大学生の先輩と後輩の会話>

先輩：出身（しゅっしん）はどこだっけ？

後輩：出身は九州ですが、引っ越しをして、高校のときは東京の学校に 1.4 かよっていた。

1.4 スピーチ・スタイルを考えましょう。先輩と後輩との会話です。後輩は先輩に「です・ます」を使います。「かよっていました」が正解です。

図 3 学習者の回答例とコメントの例

表 4 manaba 予備課題におけるスピーチスタイルについての誤用数（各課 3 問出題）

	1 課	2 課	3 課	4 課	5 課	6 課	7 課	8 課	9 課	10 課	11 課	12 課
NNS1	0	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0
NNS2	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0		
NNS4	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	
NNS5	1	2	1	0	0	0	0	2	1	0	0	

NNS7	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0		
NNS8	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	
NNS9	0	0	0	1	0	0	0	0				
NNS10	1	0	1	0	1	1	1	2	0	2	1	0
NNS11	1	1	0	0	3	1	1	2				
NNS12	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
NNS13	0	0	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0
NNS15	1	1	1	0	2	1	1	2	1	0	0	
NNS17	3	2	0	1	3	0	0	1				
NNS21	0	1	1	0	0	0	1	1	0	1	1	

表 4 を見ると、学習者によって誤用数にばらつきがあることが分かる。例えば NNS7 や NNS12 のように、最初は誤用が見られたが次第に誤用が減っていく学習者も何名か見られた。3.3.1 で述べたアンケートの記述を見ると、NNS7 や NNS12 はスピーチスタイルに関する気づきがあり、特に NNS12 は manaba に対するコメントに「以後注意します」などの返信をするほどであった。このように種々の活動を通して気づきを得、それが問題を解く際にも表れている学習者も数名見られた。

一方 NNS5、10、13、15 のように、アンケートでは気づきを得られているものの、実際に文を作る際にはその意識が抜けてしまい、結果としてスピーチスタイルに関する誤用数が減らない学習者も見られた。これに関しては、スピーチスタイルに意識を向けられるようにはなったが、その意識を持続させることまではできず、15 回の授業の中では回答に変化が現れるまでに至らなかったのだと思われる。同時に、文法項目について大量の情報を処理しつつ、スピーチスタイルにも意識を向けることは、中級後期の学習者にとっても難しいことであると考えられる。

また、NNS11、17、21 などには一貫してスピーチスタイルの誤用が見られるが、彼らはアンケートでもスピーチスタイルに関する気づきがほとんど得られておらず、最後まで趣旨が伝わらなかった例であると考えられる。例えば NNS21 は欠席が多かったこともあり、スピーチスタイルについての指導が伝わっておらず、アンケートでは授業の感想を回答していた。また NNS11 や 17 は毎回各課で扱う文法項目の難しさについて回答していた。これについては、許・鶴町（2009）が「同じクラスの中のレベル差が大きく、レディネスの多様な学習者が混在することが、中級の大きい問題点である（許・鶴町 2009：22）」「中級では、教材の仕様が大きく変わるため、学習者が戸惑いがちである（許・鶴町 2009：22）」と指摘しており、同じ中級後期のクラスの中でもスピーチスタイルに意識を向ける余裕の有無が分かれた要因の 1 つであると思われる。

その他にも、前述のように各課の文法項目の難しさも影響していると思われる。例えば第 1 課、第 2 課は最初であるということもあり意識化が始まっていないこともあるが、文

法項目としてアスペクトに関する問題を扱っており、スピーチスタイルにまで意識を向ける余裕がなかった可能性もある。同様に、第5課の「比例」、第8課の「気持ちを表す表現」は類似表現の使い分けが難しく、スピーチスタイルにまで意識が回らなかったことも考えられる。

3. 3. 3 文法クラスに対するイメージおよびニーズ

ここでは初回および最終回のアンケートにおいて設問を設けた学習者の文法クラスに対するイメージとクラスでの学習ニーズについて見ていく。まず初回と最終回の文法クラスに対するイメージを、以下の図4、図5に示す。

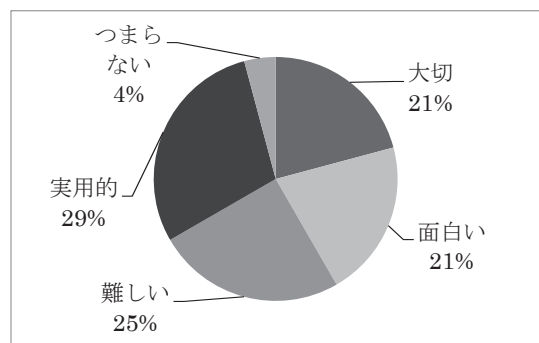
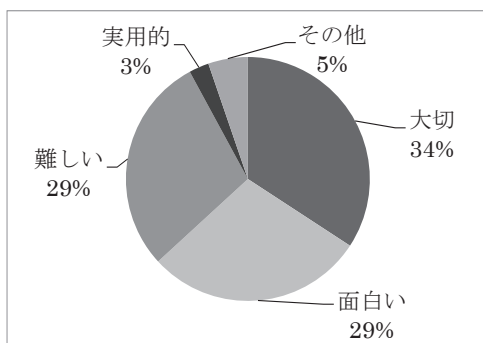


図4 文法クラスに対するイメージ（初回）

図5 文法クラスに対するイメージ（最終回）

初回は回答の例を設けたこともあり、「大切な」「面白い」「難しい」などが大半を占めた。この点は、中級文法クラスで学習者を対象にアンケート調査を実施した許ほか（2013）の「むしろ難しいものにチャレンジしてできるようになる喜びを感じてこそ満足度にもつながるのだろう（許ほか 2013：101）」という指摘と合致する。なお「その他」は一般的な文法クラスについてではなく、「すごくわかりやすかった」など初回の授業の感想を回答したものである。

一方、最終回では初回と同様「大切な」「面白い」「難しい」とする回答が多かったものの、「実用的」であるとする回答が増えた。回答を質的に見ていくと、次のようになり具体的なものが多くなった。

- ・たくさん勉強になりました。特に対人関係などの文法はわかるようになりました。（NNS2）
- ・ある言語をなるべくしぜんに使えるようになるために文法のクラスがすごく必要だと思います。（NNS9）
- ・いただいた知識などいっぱいありました。文法だけではなく、日本事情などの色々も学びました。（NNS14）
- ・文法はすごく難しいとあらためて思いました。ルールをおぼえるだけではなく、文脈を

読む、相手の気持ちを考えることもすごく大事ということで、奥深いと思いました。

（NNS19）

- ・文法は退屈だと思っていたけど、勉強すれば勉強するほど面白くなってきます。文法は日本語の勉強には基礎的で、非常に重要な内容だと思います。（NNS20）

以上のように、文法項目そのものだけでなく、その使い分け、対人関係のポイント、それに絡めた日本事情の説明、文脈を読むこと、話し手や聞き手の気持ちを考えることなどについても学んだ学習者が、文法クラスを「実用的」「役に立つ」と感じたり、様々な観点から考える必要のあることを知って「難しい」と改めて感じたり、退屈だと思っていたものを「面白い」と感じるようになっていたりしている様子がうかがえた。このことから、文法クラスの中で対人関係の視点を学習者に示しながら指導していくことは有益であると思われる。

次に、初回のアンケートで質問したクラスにおける学習ニーズを図 6 に、最終回のアンケートで質問したクラスで学べた内容を図 7 に示す。

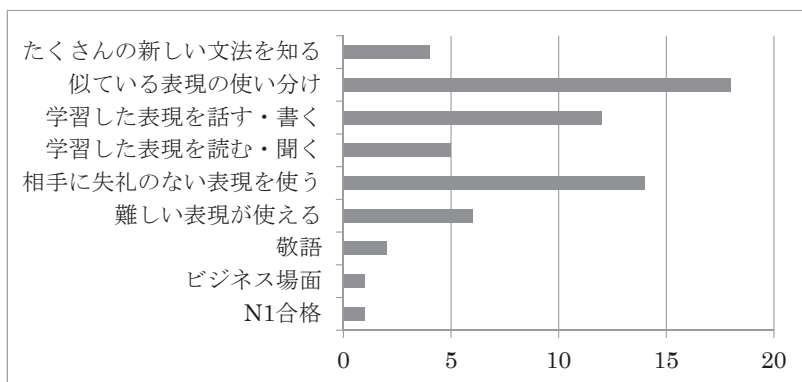


図 6 クラスで学びたいこと（初回）

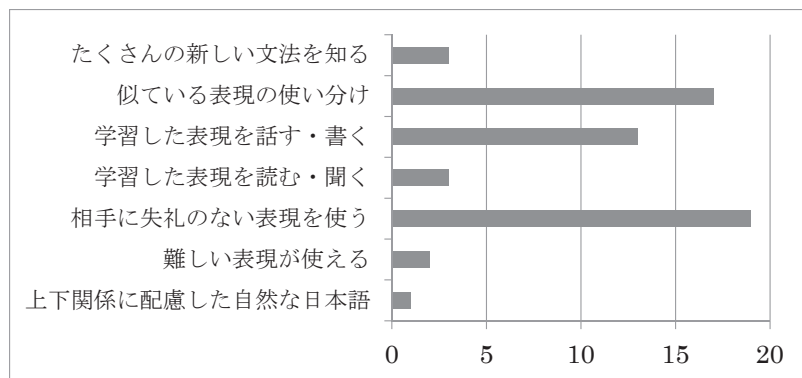


図 7 クラスで学べたこと（最終回）

アンケートは 6 つの選択肢から 3 つを選んで回答する形式のもので、他に学びたいこと

を「その他」として自由記述するというものであった（資料 1 を参照）。結果を見ると、初回のニーズは概ね最終回で「学べた」と感じていることが分かる。

ニーズとしては「似ている表現の使い分け」ができることを最も望んでいることが分かった。次いで「相手に失礼のない表現を使うこと」「学習した表現を話す・書くこと」であり、対人関係を意識し、それを運用面に繋げたいというニーズは学習者にも備わっていることがうかがえる。結果として、特に対人関係やスピーチスタイルについて学期を通じて強調してきたことで、学習者はそれらを「学べた」と感じているようである。このことから、本実践で行ってきたような試みは学習者のニーズに合致するものであり、また学習者に受け入れられるものであることが確認できた。

4. 考察

以上、実践報告を行ってきたが、本章では本実践において得られた知見をもとに、中級後期文法クラスにおける対人関係の意識化について考察する。

4. 1 学習者の意識

3 章で示した実践を通して、一部の学習者には意識の変化が見られた。本節ではその事例について述べる。

例えば NNS10 のアンケートの回答を見ると、1 回目の授業後は文法項目について回答していたが、スピーチスタイルについて再び説明した 2 回目の授業後は、「ます→上司や先輩に使います。る→親の人に使います」と記述している。アспектという難しい文法項目に混乱する学習者も多い中、スピーチスタイルに着目すべきであるという教師の意図が伝わり、「気づき」を得始めた段階であると思われる。同様に NNS16 も、「です・ます形」や「ため口」について記述している。

「もの・こと」を使う表現について学習した第 6 回も、NNS10 は「対話の相手の関係」について記述した。授業で教師が「～ものだ、ものではない」を助言の表現であると紹介し、使う相手を選ぶ必要があると説明したことが伝わったものと思われる。一方、NNS16 は練習問題にも目を向け、そこで使われていた「～って」について、「話しことば」であり、「その彼（問題文中の話し手）には固い表現ではなく」と、学習した文型で問題を解くだけでなく、言葉を使う相手のことを意識するようになっている。

第 10 回では、練習問題の中で終助詞の「かな」を断りに用いる例を教師が説明したことについて多くの学習者が記述をしており、NNS10 は「ことわる時はやわらかい表現がいい」と記述している。終助詞については授業で使う相手について考えることを強調したが、その効果もあってか、教師の説明をよく聞き、多くの学習者が対人関係に関する気づきを得ていた。

第 12 回、13 回の授業では、文脈（相手との関係や話し手の心情）を読むことが重要であると強調した。その結果、NNS10 は 2 回続けて「文脈を読む事」というキーワードを記

述しており、NNS16は「文脈を確に（正確に？）読めないと状況に合う正しい文章をつくるのがむずかしい」と記述している。両者とも文脈を読むことの必要性について考え、それが文章を作り、実際に使用する場合に繋がっていくことを意識し始めた回ではないだろうか。

第14回は、許可求めの場面で意志表現を用いることの不適切さについて教師が説明したことで、多くの学習者の回答がそれに関するものとなった。NNS10の記述は「失礼しないように話しましょう」という漠然としたものでありながら、教師の説明をよく理解しているであろうことが、ここまでの記述からうかがえる。またNNS16は、「状況とスピーチスタイルをつかえるようにすることの重要性をわかった」と回答しており、テキストの最後の課を扱った回にふさわしい、学期の授業を総括したような記述であった。今後もスピーチスタイルを含む対人関係の要素にも目を向け、それらと文法事項とを上手く繋げながら学習を進めていくであろう様子がうかがえた。

以上のように、一部の学習者には、本実践を通して文法事項のみではなく、対人関係にも意識を向けさせることができた。特にNNS10、NNS16の2名は、練習問題を解く際にも使われている文型だけでなく、会話者の関係まで考えられるようになっており、また今後も「文法」と「対人関係」とを結びつけて学習を進めていくであろうことが期待される結果となった。しかし、全ての学習者に対して効果があったわけではなく、それには様々な要因があると考えられる。以下、この点について考察していく。

4. 2 文法クラスで対人関係を意識させることの難しさ

本実践は文法クラスの中で対人関係に学習者の意識を向けさせる試みであり、それが学習者のニーズに概ね合致しているにも関わらず、容易ではないことが分かった。

まず、中級後期の学習者であっても、ほとんどスピーチスタイルについての認識を持っていないことが分かった。そのため、ウォーカー（2008a）の指摘する「意図」を強調して初回の授業から学習者に伝え、十分な時間をかけてスピーチスタイルや対人関係についての理解を促す必要があると考える。今回の実践でも初回や第2回の授業で「意図」を説明したが、それでも学習者全員が理解したわけではなかった。とは言え、実際に文法クラスの中でスピーチスタイルについての講義を行ったり、ウォーカー（2008b）のような観察タスクを行ったりするために特別に時間を割く余裕はあまりないため、例えば教師間で目標を確認し合い、「運用」や観察タスクなどの機会を会話クラスで設けるなど、他のクラスとの連携が必要となるであろう。

また、アンケートの回答から、文法項目の学習と対人関係への配慮とは別の物だという認識を持っている学習者もいる可能性がうかがえた。そのため、単に対人関係について説明し、理解を促すだけではなく、学習者の中で文法と対人関係とを意識レベルで繋げさせる必要があることが分かった。

そして3章でも述べたように、学習者にとって文法項目の理解が難しく、対人関係につ

いて意識する余裕がない場合も少なくないことが分かった。その場合、アンケートには文法項目についての気づきが現れるが、文法クラスとしては学習者が文法項目に関する気づきを得ることも重要であるため、対人関係についての回答を強要することができなかった。この点が文法クラスにおける実践ならではの悩みであると考えられる。

以上の問題点に対し、本実践で効果的だと思われたのは、①学習者が実際に遭遇し得る身近な具体例を用いて説明すること、②毎回の授業の最初に「今日の目標」として意識化させたい項目を明示的に学習者に伝えること、③小テストの答案返却や問題演習の解説など、学習者の目に見える形で「できていないこと」「理解する必要があること」を示すことの3点である。特に今回は日本の大学で学ぶ学習者を対象としたこともあり、①は効果的であると思われる。このような工夫によって、学習者の意識化を教師が助けることが可能であろうことが、本実践から分かった。

4. 3 中級レベルの難しさ

3章でアンケートの回答例や manaba を通じた予備課題について、学習者間で差があることを述べた。これについては先に挙げた許・鶴町（2009）が指摘する中級レベルの問題点が大きく関わっていると考えられる。それに加え、今回対象となった学習者はスピーチスタイルについての認識を持たないまま中級後期のレベルまで到達した者がほとんどであったため、学習観や学習ストラテジーが既に固まっており、新たな観点を取り入れるのに時間を要した可能性もある。このことから岡野（1998）や三牧（2007）などの先行研究が指摘しているように、初級段階からスピーチスタイルの指導をすることが非常に重要であることが確認できた。本実践から、中級後期の学習者であっても容易に理解可能であるとは考えず、丁寧に、根気よく指導をしていくことが必要であることが分かった。

4. 4 ウォーカー（2008a）の「意識」について

今回は15回の授業を通しての試みであったが、3.3.2でも述べたように「気づき」を得ながらもそれが実際の使用に反映されるまでに至らなかった学習者も見られた。ウォーカー（2008a）の指摘を踏まえて本実践を振り返ると、「気づき」が「認識」となるまでに至らなかった学習者が多かったということである。

この問題を解決するために、文法クラスでは4.1で述べたように日々の活動の中で「意図」を強調し、アンケートの実施などによって「気づき」を促すと同時に、manabaのようなツールを用いた「運用」の機会を充実させることが必要であると考えられる。その上で他のクラスとの連携を図り、「意図」「気づき」から「認識」への橋渡しをする必要があるだろう。本実践から、文法クラスであってもその土台を築き、学習者の「気づき」を促すことが十分に可能であることが分かった。

5. まとめ

以上、本稿では中級後期文法クラスにおいて、学習者に対人関係やスピーチスタイルを意識化させる試みについて報告し、その成果や課題について論じてきた。結果的に学習者の意識化を促し、それを運用と結び付けることは容易ではないものの、文法クラスであっても教師の工夫しだいで学習者の意識化を助けることは可能であり、またアンケートの実施等によって学習者の「気づき」を促すことも可能であることが分かった。さらに、このような試みが学習者のニーズに合致したものであり、十分に受け入れられるものであったことも示した。今後は明らかになった問題点についてさらに工夫を凝らし、実践していくことが必要となるであろう。

参考文献

- ウォーカー泉(2008a)「待遇コミュニケーション教育／学習における「意識」—初級学習段階から「意識」を学びに生かすために—」『タイグウコミュニケーション研究』5, 待遇コミュニケーション学会, 3-18.
- ウォーカー泉(2008b)「初級学習者のスピーチスタイルに関する「気づき」—待遇コミュニケーション教育に関する考察—」『早稲田日本語教育学』2, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 15-28.
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, 昭和女子大学近代文化研究所, 27-42.
- 岡野喜美子(1998)「初級におけるスピーチスタイルの指導」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11, 早稲田大学, 1-17.
- 許明子・鶴町佳子(2009)「日本語学習者の中級レベル観—中級文法クラスを受講した学生の意識調査を中心に—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号, 筑波大学留学生センター, 19-36.
- 許明子・宮崎恵子・青木幸子(2013)「学習者のための中級日本語教育文法の在り方—中級文法クラスのアンケート調査と、アチーブメントテスト結果の比較を通して—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第28号, 筑波大学留学生センター, 85-104.
- 許明子・中山健一・青木幸子・田中裕祐・宮崎恵子・永井絢子(2013)『中上級 実用日本語文法』筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター
- 三牧陽子(2007)「文体差と日本語教育」『日本語教育』134号, 日本語教育学会, 58-67.

資料 1 アンケート用紙（初回） ※2、3 は初回のみの設問

アンケート（10月6日）

国：

名前：

1. 今日の授業で、対人関係やスピーチ・スタイルについて気づいたこと、わかったことを書いてください。

2. 文法のクラスについて、どのようなイメージがありますか？自由に書いてください。
（簡単、難しい、おもしろい、つまらない、大切だ、大切ではない など）

3. このクラスであなたが学びたいことを、1～6の中から3つ選んで、番号に○を書いてください。また「7その他」に、その他に学びたいことを自由に書いてください。

- 1 できるだけたくさんの新しい文法を知りたい。
- 2 似ている表現の使い分けができるようになりたい。
- 3 学習した表現を話したり書いたりできるようになりたい。
- 4 学習した表現を読んだり聞いたりしてわかるようになりたい。
- 5 相手に失礼のない表現を使えるようになりたい。
- 6 難しい表現が使えるようになりたい。
- 7 その他（ ）

資料2 アンケート用紙（最終回）

アンケート (2月9日)

玉：

名前：

1. 文法のクラスについて、どのようなイメージがありますか？自由に書いてください。

--

2. このクラスであなたが学べたことを、1～6の中から3つ^{えら}んで、番号に○を書いてください。また「7その他」に、その他に学んだことを自由に書いてください。

- 1 できるだけたくさんの新しい文法を知りたい。
- 2 似ている表現の使い分けができるようになりたい。
- 3 学習した表現を話したり書いたりできるようになりたい。
- 4 学習した表現を読んだり聞いたりしてわかるようになりたい。
- 5 相手に失礼のない表現を使えるようになりたい。
- 6 難しい表現が使えるようになりたい。
- 7 その他 ()

3. このクラスについて、気づいたことや感想、コメントがあれば自由に書いてください。

--

アンケートへのご協力ありがとうございました！

資料 3 対人関係、スピーチスタイルに関するアンケートの記述

回数	対人関係、スピーチスタイルに関する記述
第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・人によって敬語を使うこと。(NNS3) ・先生と先輩に「です・ます」を使って、友達に「だ体」でもいい。(NNS5) ・先輩に「ですます体」を使うこと (NNS6)
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業より、目上の人に対する話し方を気をつけています。(NNS7) ・まず→上司や先輩などに使います。→親の人に使います (NNS10) ・例文はほとんど簡体でやっています。交流は丁寧体でやっています。(NNS12) ・自分より年が多い人でも、内の人にはです・ます形ではなくだめ口を使うこと。(NNS16)
第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチの書きかたについて「です・ます」形を使うことが必要ということがわかりました。(NNS1) ・先輩が普通体の「だ」を使っても、後輩は丁寧体の「です」を使う時多いということがわかりました。(NNS3) ・小テストの結果返却を見たら、うっかりすることが多かったですね。スピーチ・スタイルにもっと注意しなければなりません。(NNS7) ・先生は学生と話すときに、普通体と丁寧体、どちらでも使えます。学生は丁寧体しか使えません。(NNS9) ・先生→ていねい、普通体 学生→ます・です体 友達→る・普通体 (NNS10) ・自己紹介する時には普通「ます」形を使うこと (NNS13) ・練習のときでも、上下関係を考えるべきだとわかりました。(NNS15) ・先生は学生に話す時、丁寧体と普通体、両方使ってもいいということです。(NNS16) ・先生と学生の会話中、先生の場合は「ます」「る」の使いをまだしつかりわかってないと思います。(NNS17)
第4回	該当なし
第5回	<ul style="list-style-type: none"> ・目上の人には「べらべら」というような言葉が使えません。(NNS3) ・先生はときどき普通体も、丁寧体も使います。(NNS9)
第6回	<ul style="list-style-type: none"> ・第3課 まずはやってみようの4番 A・Bは恋人同士かもしれないので、親しい言い方、たとえば「ひどい！」などを使っているわけだ (NNS12) ・「～ことだ」という表現は目上の人には使うのは禁止だということがわかった。(NNS2) ・「ものだ／ものではない」は助言する表現ですので、上の人には使わないほうがいいです。(NNS3) ・自然な日本語を使いたいのなら、文法だけではなく、話す相手との関係を考えなければなりません。(NNS4) ・対話の相手の関係はなんとなく分かりました。(NNS10) ・「もううわけにはいいかない＝もうらう」という所は面白かった。(NNS15) ・「って」は話しことばだから、その彼には固い表現ではなく、話しことばを使うこと。(NNS16)

回数	対人関係、スピーチスタイルに関する記述
第7回	<ul style="list-style-type: none"> ・目上の人には「する」表現より「なる」表現を使った方がいい。(NNS3) ・目上の人に「なる」を使うことはわかりました。(NNS6) ・スピーチ・スタイルのことについて、だいぶ慣れました。(NNS7) ・小テスト 会社でも、いろいろなスピーチスタイルがあるから、これからも注意します。(NNS12) ・「なる」を使う表現は礼儀のある表現として思われる。(NNS16)
第8回	<ul style="list-style-type: none"> ・試験のために、スピーチ・スタイルを気づきました。(NNS7)
第9回	<ul style="list-style-type: none"> ・対人関係について、「ね」と「よ」のちがひがあります。(NNS2) ・「ね」というような終助詞は目上の人とか、あまり親しくない場合は使わない方がいい。(NNS3) ・「よね」と「ね」と使う場合は注意しなきゃ。(NNS6) ・目上の人に何かを頼むときは「ね」を使いませぬ。(NNS9) ・じよしはコミュニケーションの中に大事であるとわかった。(NNS15) ・目上の人に、初対面の人に「ね」は使えないことは知らなかったです。人と関係を縮めたいけど、いきなりそういう言い方できませんよね。これから気をつけます。(NNS19)
第10回	<ul style="list-style-type: none"> ・頼まれたことを断りたい時、特に目上の人に対してはやわらかい表現を使った方がいい。(NNS3) ・日本人は直接に断る表現を使わなく、やわらかく表現を使う。今後気をつけます。(NNS4) ・目上の人にこわりたい場合は「かな」を使う。(NNS6) ・小テストの時、スピーチスタイルを気づきました。(NNS7) ・こわる時はやわらかい表現がいいです。(NNS10) ・日本人の「Noはいわない」を勉強しました。(NNS14) ・人にNoを言いたい時、人にNoを言わせるほうがいい。すごく勉強になりました。(NNS19)
第11回	<ul style="list-style-type: none"> ・「もし差し支えなかったら」はしらない人と目上の人を使う表現だと知りました。(NNS2) ・「あのね」というような言葉は目上の人に使わない方がいい。(NNS3) ・今日は「前置き」についての知識を勉強しました。今後は礼儀正しく断ることが出来ます。(NNS5) ・日本や中国の友達でも「ちよっと…」を使いますが韓国の人には使いません。(NNS6) ・国によって、対人関係は違うことが分かりました。(NNS7) ・前置きを使わないと他人をビックリするかも。(NNS10) ・日本人の「配慮」について勉強しました。(NNS14)

回数	対人関係、スピーチスタイルに関する記述
第11回	<ul style="list-style-type: none"> ・会話をする時、文化の違いを考えるのは大切である。(NNS15) ・話しかける前に、相手にびつくりさせないため、前置の言葉を使います。(NNS18)
第12回	<ul style="list-style-type: none"> ・文脈を読む事。(NNS10) ・文脈を読むことが大切であることがわかりました。(NNS18)
第13回	<ul style="list-style-type: none"> ・先週は休みだったので、「文脈を読む」ということは了解していなかった。今日はよく理解しました。(NNS4) ・今日は予想外の表現を勉強しました。話し手の気持ちを考えながら、自然な日本語を話せます。(NNS5) ・文脈や話し手の気持ちの重要性を理解しました。(NNS6) ・話し手の気持ちを考えて、理解できます。(NNS8) ・文脈を読む事。(NNS10) ・①文脈を読む、②話し手の気持ちを考える 両方にちゃんと理解しないといけない。(NNS13) ・文脈を確に読めない状況に合う正しい文章をつくるのがむずかしいことがわかった。(NNS16) ・文脈を読むのが重要であることがわかりました。(NNS18) ・「文脈を読む」という言葉を意識しながら練習やると、書いた言葉が前より自然になった気がします。(NNS19)
第14回	<ul style="list-style-type: none"> ・失礼しないように話しましょう (NNS10) ・つもりの使い方がいろいろだが、例えば先生にメールで「東京に行くつもりなので、授業に行けなくなりました」という内容をよく書くので、行こうと思うので、休ませていただけないでしょうか」を書いた方がよい。(NNS13) ・状況と聞き手に合うスピーチ・スタイルをつかえるようにすることの重要性をわかった。(NNS16) ・お願いをするとき、自分の意志を言うのを避けた方がいいことを勉強になりました。(NNS19)
第15回	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチスタイルや丁寧語は日常生活に注意すべきものです。日本人と話すとき、自分が話したい言葉を正確的に伝えることは難しいが、ちゃんとできるようにしたい。(NNS6) ・いろいろ勉強になりました。文法そのもの、対人関係、スピーチスタイルなどの各角度から、文法というものを再認識しました。今後の日常生活にも勉強にもとても助かります。ありがとうございました！(NNS12) ・日本語の勉強は楽だと言えるが、上下の関係も考えながらどのように学んだ文法を正しく使うべきのか。そのことに対して、日本の文法を学ぶことで、うれしいなと思う。(NNS13) ・文法は大切、また文脈を読む必要があります。文脈を理解した上で文法正しい文を作るのが大切です。(NNS20)